

らうんじ・茶王樹・南九十九里から

2012年7月～12月

+++++ 2012・11・06

成田市生涯大学院で「丈人力のススメ」講座

ことしも成田市生涯大学院1年生の2組にそれぞれ「丈人力のススメ 高齢期の生き方」と題して話をした。1組40人余でみなさん60歳以上である。専門講座と合わせて一般教養の課目があって、そのひとつとしてである。成田の特徴は、専門6講座を技術・芸術分野を中心にしているところにある。書道、園芸、陶芸、油絵、音楽そして体操で、3年の間まずは自分が技能を高めて楽しみ、クラスみんなで切磋してお互いの向上を楽しみ、そのあと卒業後は成果技術で市民みんなを楽しませようというコンセプトに無理がない。いわゆる文化系の知識部門がないが、高齢期に必要な知識は年間25の教養講座によって共有されている。ことし9月に見直され、高齢社会の体現者である高齢者が知っていなければならない「高齢社会対策大綱」の話をし、「支える側の高齢者」としてのありようを考える契機になればと、「高齢化時代のライフサイクル」と「賀時期5歳層」の話をした。

+++++ 2012・10・4

藤井裕久民主党最高顧問に聞く(衆院第一議員会館919室にて)

10月4日(木)午後、尾崎美千生(元毎日新聞政治記者)氏と議員会館の事務所にお訪ねした。政界の経緯を熟知しておられる藤井顧問と熟練政治記者尾崎氏の示唆に富む時局対話に挿入するようにして、「日本長寿社会(高齢社会)」のありようについての積年の憂慮を伝え、ご意見を聞いた。

「国民福祉税」での4経費完全目的税化のこと、与謝野さんの功績、全国民が負担する消費税のこと、「高齢者雇用安定法」のこと、1500兆円の使い途、80歳現役のこと、ご隠居論、アジアへの貢献、匠の技術のアジア転移、「新成長戦略」、領土問題と歴史観、「近現代歴史調査会」のことまで、的確・有用なコメントをたくさんいただきました。何よりも「80歳での隠居はありません」は心強いコメントでした。(別稿でまとめます)

帰り際に「尾崎さんの驥尾に付して」というと、「二階堂さん以来だから」といって、お二人は“なつかしい二階堂さん”を思い起こしておられたようでした。

+++++ 2012・9・17

高齢者が3000万人に(敬老の日発表)

高齢者(65歳以上)が3000万人に達しました。(3074万人。高齢化率24.1%。9月15日現在。総務省)

百歳以上が5万人に達しました。(5万1376人。男性6534人、女性4万4842人。9月1日時点。厚

労省)

世界最高齢の木村次郎右衛門さんが115歳でこの日を迎えて祝福されました。(明治30=1897年4月9日生まれ。京丹後市)

新「高齢社会対策大綱」が11年ぶりに閣議決定(9月7日)されたのに話題とならず、新聞各紙に「敬老」に関する記事が乏しくて迎えた「敬老の日」に。(9月17日。第3月曜日)

+++++ 2012・9・7

新「高齢社会対策大綱」が閣議決定に

昨年10月から10年ぶりの見直しにはいついた「高齢社会対策大綱」が9月7日に閣議決定されました。国際的に先行する「日本高齢社会」が失敗事例にならないための指針でもあり、3000万人に達した高齢者に広く訴えるべきはすのものなのです。

あれほど財源となる「消費税増税」論議に熱意を示した政治の側が、将来の「大綱」に関心を示さず、ありうべき「長寿社会」構想を論じることもないことに周回遅れが際立つばかりです。

学者・官僚主導の「見直し」が、「人生65年時代」の「支えられる高齢者」と重ねて「人生90年時代」の「支える高齢者」への意識の変革と「社会参加」による仕組みの変換を指摘し要請しているのですから、政治家は覚醒せよと叫びたいところです。・・そして国民も。

+++++ 2012・9・1

web「月刊文風」9月号 編集月旦

☆「消費税増税」法案に賛成の白票を投じたとき、議員の方々はどんな社会を思い画いていたのでしょうか。いなかった?! ☆財源論争ではなく、実態のある「長寿社会」構想を政策の芯柱にすえる政権を出現させねば。そのために、「総選挙」は3000万票のオトン+オカンパワーが動向を左右せねば。

☆民主党政権での「高齢社会対策」担当大臣が9人目ということをご存じでしたか。☆10年目の見直し中の「高齢社会対策大綱」骨子案が内閣府から出ました。パブリック・コメントを求めるためのもの。「人生90年時代の支える高齢者」の存在を明確にしたことは画期的なこと。☆「高齢社会白書」ができました。読中感想をる述べています。☆「いなみ野学園」のカリキュラムは高齢者大学校の参考に。☆「平均余命」は「余生」としては長すぎますね。☆「三世代年表」は次回完成します。☆募集。「自選人生五句」ひとつを辞世の句にしたりして。「座右の銘」越えられない人のことば。☆17日(第3月曜日)に「敬老の日」を迎えます。10月1日は「国際高齢者の日」です。本誌は熱く記念しますが、ことしも目立つ行事はないでしょう。☆「亜起良」は平和裏のアジア共生のために。(2012・9・1 堀 亜起良記)

+++++ 2012・8・10

「消費税増税」法案が採択されました

わが国議会は、衆議院が6月26日、参議院が8月10日に、「社会保障」の安定財源として「消費税増税」法案の採決をおこないました。増税賛成の白票を投じたとき、議員のみなさんは壇上で、どんな「長寿社会(三世代多重型社会)」を思い描いていたのでしょうか。次の総選挙での政策の争点としてしっかり示してもらわねばなりません。

一方、3000万人に達したわが国の高齢者(65歳以上)は、1999年の「国際高齢者年」を機に国連が訴えた高齢者五原則「自立、参加、ケア、自己実現、尊厳」を、身をもって体現して過ごしてきたでしょうか。「みんな(all ages)のための社会」(「国際高齢者年」にかかげた目標)の達成のために、長年かけてつちかった知識・技術・資産を活用することで、持続的な経済成長をなしとげながら暮らせるよう高齢者の側のありようを顧みるときでもあります。いま高齢者は、「来日方長」(来たる日まさに長し)といえる「長寿社会(三世代多重型社会)」構想をかかげて、日また一日、その達成をめざした活動を着実に推し進めることが求められているのです。

+++++ 20120804

新しい「高齢社会対策大綱」の骨子案をみて

昨年(2011年)10月から10年ぶりに改定作業にはいついた「高齢社会対策大綱」の骨子案ができて、意見募集をしている。骨子案であるから細部には未確定のところもあって整理までは間がある段階での公開となっているが、それでも完成形としてのおおよその「樹形」は判断がつく。拝見したところでは、前半の「目的及び基本的考え方」で有識者が検討した報告書の趣意を取り込んで、後半の「分野別の基本的施策」では前回の「大綱」の見直しがなされている。前回2001年の「大綱」がそのまま活かされるところが多いということは、内容が優れたものであることの半面で、実態として進捗が少なかったことの証でもある。意見は「月刊丈風」紙上で述べるが、「人生65年時代」から「人生90年時代」への意識変革を想定し、元気な高齢者層の「社会参加」を要請しているところに内閣府高齢社会対策担当官の構想力をみることができる。同じ時に「消費税増税」を論じている政治の側がいかにかに周回遅れであるかが際立つのである。

+++++ 20120801

web「月刊丈風」をリリース

いまある「しくみ」を先人から引き継いで担っている“現役”の人びとが不安に感じていることは、いまいる高齢者の暮らしよりも(とともに)その先方のみずからの高齢期の暮らしでしょう。後人に安心を与えるのは、いまある「しくみ」のなかで、強い「社会保障」の恩恵を受けながら高齢期を安心して生きつづける姿よりも(とともに)、高齢者として前人未踏の「モノと場としくみ」の中を模索して生きつづけながら、新たな長寿社会(人生90年時代)をつくっている姿でしょう。それは史上にまれな長寿をえた者としてなすべき努めです。いまある「しくみ」をつくってきて、とくに際立ったことをはじめのわけではなく、生活圏のなかで、それぞれが応分の努めを担うことからはじまります。経緯として半歩ほど先にみてなすべき

立場にある者として、同時多発であることを願いながら、立ち上げた「月刊丈風」をその拠点のひとつとして公開いたします。

+++++ 20120711

平成24年度「高齢社会フォーラム・イン東京」

平成24年度「高齢社会フォーラム・イン東京 ー高齢者(シニア)の社会参加が世の中を変えるー」が、7月11日(水)、AP 浜松町(昨年は東京フォーラム)で開かれた。定員200名。参加費無料。

プログラムの説明をすると、10:10 開会挨拶 内閣府大臣官房審議官・内野淳子 高齢社会NGO連携協議会共同代表・堀田力 10:30 基調講演「高齢者(シニア)の社会参加が世の中を変える」樋口恵子(高齢社会NGO連携協議会共同代表・高齢社会をよくする女性の会理事長) 11:30 「高齢社会対策の現状と課題」内閣府高齢社会対策担当参事官・原口剛 13:30 分科会(3分科会) 第1分科会「就業・企業する」 第2分科会「広域的ボランティア活動の考察と参加」 第3分科会「地域社会活動(自治体・社教との協働)ボランティア」 16:30 閉会。

各分科会とも活発な議論がなされたが、ことしもメディアの取材がなく、ニュースとして報道されることがなかったようである。

+++++ 20120708

『毛沢東的詩詞、人生和思想』について

京都の竹内実先生から上記タイトル『毛沢東的詩詞、人生和思想』の中国での発行図書とお手紙をいただいた。お手紙には「九十九里浜南端にいて、人生に向日的であること」はいいことだとおほめをいただいた。向日的であることが伝わってうれしいが、いつも老師からお手紙をうけとるたびに思うのだが、とてもすぐにはご返事ができない。向日的なせいもあって日常的に雑駁な気分支配されていて、このままでは対話ができないからで、それに今回は飛び火することが多い著書との出会いがある。武田泰淳・竹内実著の『毛沢東の詩と人生』が、こうして半世紀をへて中国で「国外毛沢東研究叢(第二集)」として出版されたことは快挙であるし、率直に誇っていいことだ。「我と毛沢東」では、握手した時の感じに「糖果的柔軟感」があったと訳されると、メディアが報じた革命家毛沢東のイメージにない実質が伝わってくる。赤いカバーに白文字のタイトルで重量感のあるこの一冊は、わたしの新刊書棚に存在感をもっておさまった。